

書評

館 暲 著

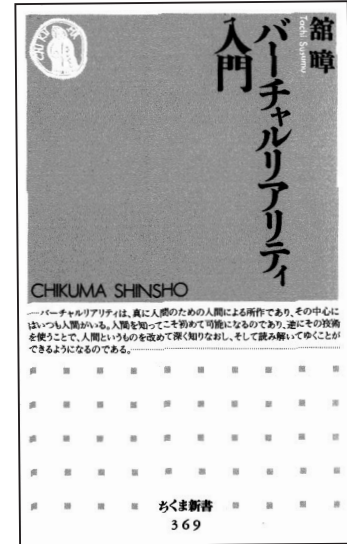
バーチャルリアリティ 入門

ちくま新書 筑摩書房

ISBN4-480-05969-5

2002年発行

評者：長崎総合科学大学 北島律之



「バーチャルリアリティ入門」。このタイトルだと、玄人というよりは、バーチャルリアリティ（VR）に何となく興味があると感じる人たちに向けられたものとみて間違いない。すなわち、VRの世界に、躊躇なく一步を踏み出してもらえれば成功といえる。はたして、一步を踏み出す勇気を与えてくれるのだろうか？ そのような思いから読み始めた。

一読すると本著に2つの側面があることに気づく。第一に、VRの歴史と現状および技術の紹介であり、第二に、VRの研究開発という観点から人間を見つめるという著者の哲学である。まず、第一の側面については、正道でいて実に深遠なものといえる。最初に「バーチャル」の意味を示し、「仮想」という訳語に警鐘を鳴らすところから始まる。その後、アメリカでのVR創世記、日本における発展、「日本VR学会」がつけられた背景まで筆者の体験や行動を交えて話がつづく。VRの考え方と歴史のダイジェストが生々しく語られており、ここまでくればVRの世界へ一步を踏み出すための良質の靴を履いたようなものである。一方、技術面については、各感覚の基本特性から各々に特有のディスプレイまで具体例を挙げて論じたかと思えば、後半ではオーグメンティッド・リアリティやテレプレゼンスといった応用面についても詳細に述べられる。特にテレプレゼンスに関しては、著者が行った研究や成果が年代ごとに述べられており、学会等で著者の研究室の発表を聞く機会がある、ある種の玄人にとっても有意義なものであろう。

このように、VRの歴史や現状および技術について丁寧に解説されるが、著者の視点はそれだけにとどまらない。人間を見つめるというもう一つの側面についても饒舌に語られる。20世紀前半は、技術が機械をつくり人

間がそれに従うという考えが大半を占めている「機械主義」の時代であって、その考えが行き詰まったところに現在のような問題の多い社会状況があると嘆く。そこで著者は、誤解を恐れずに「人間主義」への回帰を唱えるのである。一例として、人間の世代交代の速度をはるかに上回る機械の世代交代により、使う主体であるはずの人間が振り回されていることが挙げられている。この対応として、インターフェースには自然界や旧知のものを積極的に利用し、一般の人が容易に機械に接することができることの重要性が述べられている。まさに、デザインへのアフォーダンスの役割とも方向を一にし、心理学までを範疇にとらえていることが伺える。さらに、この人間主義はこれから生まれてくる命まで視座に入れ、万人について論じられており実に壮大である。このような観点から見ると、著者らの提唱するネットワークを介したパーソナルなテレプレゼンス（アールキューブ）が、より色彩を帯びたものになってくる。身体障害者が自分の代わりに山登りをするロボットとつながり、体感的に山登りをできることは、本当に夢のある話であり、ドキドキさせられる。この感覚はおそらく、研究の推進力であるのだが、技術を介して提供する側と使う側の人間がつながる瞬間にこそ、引き起こされるものだろう。

本書は、VRへ一步を踏み出す勇気を与えてくれるとともに、その後に向かうべき方向まで示唆してくれる贅沢な一冊といえる。ただ、あえて言わせて頂ければ、もう少し多くの研究機関における成果を取り上げて頂けたらと思う。例えば、触覚装置としてユニークな東京工業大学のスパイダーは3行しか述べられておらず、少々残念な思いもした。ただ、紙幅の制限もあり、これは贅沢な一冊への贅沢すぎる注文かもしれないが...